

ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任

2022年度の担当科目一覧表

科目区分 (教養/専門/教職)	科目名	種別 (必修/選択)	開講時期	受講者数
専門	ピアノ指導法	選択	2年前期	6名
専門	合奏	選択	2年前期	20名
専門	音楽キャリア1	選択	1年後期	3名
専門	伴奏法	選択	1年後期	5名
専門	専修実技1~4(ピアノ)	選択	前後期	5名
専門	専修実技A	必修	前後期	1名
専門	音楽実習	必修	専攻科通年	1名
専門	演奏会研究	必修	専攻科後期	1名

*科目区分:「教養」、「専門」、「教職」の3つから指定すること。

*種別:「必修」、「選択」の2つから指定すること。なお、選択必修は「選択」とする。

2. 教育の理念

音楽は、生きる上で重要な役割を果たしていると考えている。言葉で理解するのではなく、心に直接感じることができるものが音楽であり、生きるための刺激であり活力と考えている。美術に構成やモチーフ、テーマが存在するように、音楽にも同じものがある。美を感じるためには、知識を含む教養や美しいと感じる感覚が必要である。音楽の場合、受け取る側にもある程度の知識は必要であるが、聞くことにより感じ取ることは可能である。また、演奏技術を見ることは楽しみでもある。それに対し、提示(演奏)する側にとっては、音楽を理解していなければ表現できないし、何も無ければ演奏しても無意味である。何も考えられなければ、機械による演奏と大して変わらない。1つ違うのは、人が努力して演奏しているという緊張感のみである。演奏する際に必要な事は、和声・リズム・フレーズ・形式・時代背景・楽器の特性・演奏技術(音色を含む)など数多くあり、書き出すとキリがない。それらを知識として知り、技術として習得し、表現として再現できる力が必要である。この能力は社会生活を送るためにも役に立つ。目の前にある事に対する直感、分析、改善、再構築する回路である。また、社会人として活躍の場として、表現(芸術)活動や指導(講師等)能力が考えられるが、コミュニケーション力は大変重要である。そのため、学生が自ら考え、自ら方向を導き出し、努力・成長できるよう、課題や口頭による問いかけを多く行い、言葉での発信、表現ができるよう指導を行っている。

3. 教育の方法

①講義では、個人へ出した課題を発表という形式で行い、それに対しフィードバックを行うようにしている。個に対し指導を行うが、全体もそれを知ることにより、自らへ還元できるようにしている。また、伴奏法ではルーブリックを使用し具体的内容を示すことにより、学生の学びの方向性を示している。

- ②レッスンでは、教員側からの道筋はなるべく示さないようにしている。自ら考えさせ、演奏したことに対し、言葉でフィードバックを行っている。それでも表現できないときは、楽譜の分析方法を示し、模範演奏、模範技術を示し、学生自身が感覚的に納得できるようレッスンを行っている。学生の理解力は様々であるため、学生の能力に合わせた言葉や方法を選択している。音楽は言葉で表せない感覚的なことが重要であるため、真似が一番大切である。しかしその能力の低い学生には、前段階の言葉での説明に時間を費やすことも多い。
- ③この2年に、顔の表情が無い、話しても反応が薄い、話すことが難しいなど②の指導法では対応できない学生が出てきた。それらの学生には、子供の指導同様に弾いて聞かせることにより、音楽の熱を伝える事ができる。すぐに真似できる学生、できない学生と様々であるが、その状況を見て、真似できない学生には、具体的な指示を与えることにした。例えば、指を上げる理由、打鍵のスピードによる音色の変化などを、1つ1つ解説しながら進める事とした。その他、弾きながら話しても聞き取れない学生もいることがわかった（授業評価アンケート）。その学生には、模範演奏と話を分けてレッスンすることとした。

4. 教育の成果

- ①授業の成果は、レポートや発表である。「伴奏法」においては、ピアノが専門ではない管楽器の学生を担当している。この学生達にピアノ演奏能力を求めても意味が無い。技術習得には時間を要するためである。そのため、「伴奏とは」という意味付け、ピアノの役割、ピアノ伴奏を弾かせることにより、自分の楽器へと還元できるようにしている。目標技術を下げることにより、内容の習得ができる。発表では、全員演奏することが出来ているため成果が出ていると考えている。教職履修者にとってピアノ演奏は必須である。その学生には、技術を多く学ばせている。また、口頭発表が多い「音楽キャリア1」では、事前に練習をさせることにより、発表の完成度を目指している。最終授業で、外部講師の前で発表させているが、外部講師から問題の指摘は無く、成果は出ている。「合奏」では、専修実技の技術を持っている学生が受講するため、良い演奏が出来ている。「ピアノ指導法」では、経験上良い発表を行っているが、なぜそのようにすべきかの説明が出来ない。多くの知識を与え、調べさせることにより、学生自身に気づかせるようにしている。
- ②実技レッスンの成果は、すべて演奏結果である。期末試験でどのような演奏になったかのかが、重要な証拠となる。止まってしまった学生、演奏はできたが内容の薄い学生など、その内容により、学生がどの程度、技術や演奏能力を身に付けたか評価し、次回へと導いている。尚、どの程度という評価は、個人教員の評価であり数値化は難しい。授業評価アンケートにおいて、良い勉強ができたと述べていることから、成果が出ている。
- ③専攻科はゼミ形式で実施している。各学生に対し必要なことを指導できている。

5. 今後の目標

- ①授業においては、学生の学びをスムーズに行うため前時間の復習を行い、新しい課題へと結び付けており継続する。
- ②レッスンにおいては、学生の能力により指導法や結果が変わってくる。すべての学生が、納得できるレッスンを心掛け、表現力や技術力が良くなった時はその事を学生に伝え、さらなるチャレンジを求めたい。2年生には学外演奏の機会を与え、表現力を深めさせたい。
- ③教職を希望する学生にはピアノ演奏力が求められる。「伴奏法」での練習量や練習方法を指導しながら課題のフィードバックを行い、学生に努力を求めたい。
- ④ピアノ指導法においては、講師として活躍するためには多くの知識が必要とされる。学生は技術が向上するための練習に多くの時間を費やしている。学生が将来自ら向上できるよう、様々な知識を示し考えさせることにより授業を実施している。同様に継続する。

⑤個人の性格の幅が大きくなっている。他の学生が出来るからこの学生も出来るだろう、という事は通用しなくなった。個人の性格と能力を判断し、個に合わせた指導を努力する。

根拠資料

- シラバス
- 授業評価アンケート結果
- 授業改善計画書
- 授業メモ
- レッスンノート